

公開フォーラム

「アメリカ大陸古代文明の神秘のベールをはがす」

●プログラム●

2014年4月19日(土) 13:00～ 受付開始

【第一部】

13:30～14:20 基調講演「行きつ戻りつアンデス古代—アンデス研究をふりかえる」
大貫良夫(野外民族博物館リトルワールド館長・東京大学名誉教授)

14:20～14:30 休憩

14:30～17:00 シンポジウム「古代文明の終焉」

○パネリスト

青山和夫(茨城大学教授)

「マヤ文明は古典期に崩壊しなかった:最新の調査研究から」

坂井正人(山形大学教授)

「ナスカ社会と地上絵の終焉」

渡部森哉(南山大学准教授)

「国家に抗する社会カハマルカ」

佐々木直美(法政大学准教授)

「アヤクチョの祭りと移民たち」

○総合討論司会

関 雄二(国立民族学博物館教授)

【第二部】

17:10～17:50 アンデス音楽の調べ

○演奏

グループ・アルトゥラス

会場:法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26階 スカイホール

主催:法政大学国際文化学部

国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者:関雄二)

共催:アンデス文明研究会(※アンデス文明研究会 20周年記念事業)・法政大学アンデス文化研究会

協力:古代アメリカ学会

【第一部】

講師プロフィール

●大貫 良夫



東京大学名誉教授・野外民族博物館リトルワールド館長・アンデス文明研究会名誉顧問。専門はアンデス考古学。コトシュ遺跡、クントゥル・ワシ遺跡などから得られたデータを基に古代アンデス文明の形成過程を研究している。

著書に『アンデスの黄金—クントゥル・ワシの神殿発掘記』（中公新書）、『アンデス「夢の風景」』（中央公論新社）、『黄金郷伝説—エル・ドラードの幻』（講談社現代新書）など。

●青山 和夫



茨城大学教授。専門はマヤ考古学。グアテマラ、ホンジュラスの現地調査から、先古典期と古典期のマヤ文明、手工業清算と日常生活、環太平洋の環境文明史を研究。著書に『古代マヤ 石器の都市文明』（京都大学学術出版会）、『マヤ文明—密林に栄えた石器文化』（岩波新書）など。

●坂井 正人



山形大学教授。専門はアンデス考古学、文化人類学。古代アンデス社会を対象とした景観考古学的研究を実施している。これまでナスカ、インカ、チムー、形成期などの諸遺跡で現地調査を行ってきた。

著書に『ナスカ地上絵の新展開』（編著、山形大学出版会）、『ラテンアメリカ』（共編、朝倉書店）、*Reyes, estrellas y cerros en Chimor* (1998年、Editorial Horizonte)など。

●渡部 森哉



南山大学准教授。専門はアンデス考古学。南米アンデス地域に発展したワリ国家の拡大過程、および地方支配の実態を、ペルー北部高地で調査研究している。

著書に『インカ帝国の成長—先スペイン期アンデスの社会動態と構造』（春風社）ほなど。

●佐々木直美



法政大学准教授。専門は文化人類学、ラテンアメリカ地域研究。ペルーの舞踊と現代社会を研究テーマとしている。

著書に『講座 世界の先住民 中米、カリブ、南米』（共著、明石書店）、『ペルー 民衆文化に現れるエスニシティとアイデンティティ』（共著、朝倉書店）など。

●関 雄二



国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問。専門はアンデス考古学、文化人類学。南米ペルーにおいて神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の成立と解明に取り組んでいる。

著書に『アンデスの考古学』（同成社）、『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、『古代アンデス 神殿から始まる文明』（共編著、朝日選書）など。

マヤ文明は古典期に崩壊しなかった:最新の調査研究から

青山 和夫 (茨城大学)

1. 世界は「四大文明」だけではなかった:アメリカ大陸の一次文明を十分に記述する「真の世界史」

(1) 日本社会において、マヤ文明は「神秘的な謎の文明」として誤解されている場合が多い。世界史の教科書において西洋人が侵略する前のアメリカ大陸の記述は、質量ともに極めて貧弱。

(2) アメリカ大陸では、100以上の栽培植物。世界の食文化革命(世界の食材の6割は、アメリカ大陸原産:トウモロコシ、トマト、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、インゲンマメ、ゴム、タバコ、カカオ、バニラ、アボカド、ピーナッツ)。観葉植物:コスモス、ポインセチア、ダリア、マリーゴールド)。 アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付け、バランスの取れた、よりグローバルな「真の世界史」を学ぶ上で、マヤ文明やアンデス文明の研究は重要(青山2007)。

(3) マヤ文明とは(青山2012)

①旧大陸世界と交流することなく、中米で発展したモンゴロイド先住民独自の文明(前1000年~16世紀)、②石器を主要利器とした人類史上で最も洗練された「石器の都市文明」、③支配層のものづくり:洗練された美術品、④結果的に大型家畜や荷車を必要としなかった人力文明、⑤主に非大河流域の文明、⑥政治的に統一されず、熱帯の多様な自然環境に諸国家が共存(今日的意義:多様性を保つことが、文明の回復力を高める)

(4) 世界の他の古代文明と比較しうる類似点

①文字(ゼロの文字、算術、暦、歴史、天文学)、②都市、③国家、④神聖王、⑤農業を基盤とした生業、⑥戦争、⑦政略結婚、⑧巨大な記念碑的建造物

(5) マヤ文明の人類史的な位置付け:人類史上で最も洗練された「究極の石器の都市文明」(青山2013)。石器が主要利器であったことは、マヤ文明が、旧大陸の「四大文明」よりも「遅れていた」ことを必ずしも意味しない。

(6) 青山は、1986年からホンジュラスの世界遺産コパン遺跡やラ・エントラダ地域、グアテマラのアグアテカ遺跡やセイバル遺跡などでマヤ文明の調査に従事。

2. マヤ文明の盛衰:セイバル遺跡(グアテマラ)の最新の調査

①セイバル遺跡:国立遺跡公園に指定された、グアテマラを代表する国宝級の大都市遺跡。セイバル遺跡は、前1000~後1000年の約2000年にわたる政治経済組織の通時的研究、すなわち、マヤ文明の起源、王権や都市の盛衰などの研究に理想的な遺跡。

②ハーバード大学の調査(1964~1968年)の後、約40年ぶりに調査を開始。

③大規模で精密な発掘調査及び豊富な試料の¹⁴C年代による詳細な編年の結果、マヤ文明の特徴である公共祭祀建築と公共広場は、従来の学説よりも少なくとも200年ほど早く前1000年頃に建設されたことがわかり、米国の科学雑誌サイエンスに2013年4月に発表した(Inomata, Triadan, Aoyama et al. 2013)。

④公共広場の東と西に面する公共祭祀建築の基壇は増改築され続け、前9世紀に西側の基壇は神殿ピラミッドになった。神殿ピラミッドは、人工の神聖な山を象徴した。多くの人を動員して神殿を増改築してさらに大きな神聖な山を築き、権力を強化した。

⑤これまでマヤ文明の起源に関して、マヤ低地の西隣、メキシコ湾岸で栄えたオルメカ文明の一方向的な影響によって興ったとする説や、マヤ低地で独自に興ったとする説が提唱されてきたが再考する必要がある。マヤの人々は、オルメカ文明の特徴の巨石人頭像を取り入れなかった。オルメカ文明のラ・ベンタ遺跡では、公共祭祀建築はセイバルより遅く前800年以降に建設された。従来の見方とは逆に、マヤからオルメカへの影響も考えられる。

⑥マヤの人々は、地域間ネットワークに参加して、グアテマラ高地産の翡翠や黒曜石、海産貝のような重要な物資だけでなく、観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら交換して、マヤ文明を築き上げていった。中

米は独自に文明が誕生した世界でもまれな地域であり、マヤ文明の形成過程の解明は、中米だけでなく人類史を考える上でも重要。

3. 古典期マヤ文明の盛衰と歴史的教訓

- ①「古典期マヤ文明の衰退」：「崩壊」ではない。
- ②古典期終末期の9世紀になると、マヤ低地南部で石造記念碑と大建造物の建立が途絶え、多くの都市が放棄。マヤ低地北部では、多くの都市が繁栄。
- ③衰退の原因：複数の要因の相互作用（人口過剰、環境破壊、戦争、干ばつ?）。
- ④マヤ低地南部では8世紀に総人口がピークに達し、農耕地や宅地の拡大によって森林が減少し、農耕によって土地が疲弊した地域が多かった。多くの都市で、人口増加のペースが土地の再生に必要な時間を上回り、食糧が不足した。多くの都市が繁栄を極めた結果、その限界を超えて衰退。
- ⑤マヤ文明の歴史的教訓：マヤ低地南部の諸王は、当時の文化的バイアスに基づき、自らの権威を正当化し、神々の助けを請うために、巨大な神殿ピラミッドを建設し、更新し続けた。農業がさらに圧迫され、食糧が不足し、戦争が激化。古典期末の大神殿ピラミッドは、マヤ文明の黄昏時の始まりを象徴。
- ⑥こうした傾向は、スケールや時代背景は全く異なるが、西洋科学文明の「進歩」や市場原理主義を追求した結果、70億人の「宇宙船地球号」が直面している現代の重大な危機（地球規模の環境破壊、日本をはじめとする先進諸国における農業人口の減少、地球人口の増大に伴う食糧難や飲み水の不足、地球上で絶えることがない戦争やテロ）に酷似。
- ⑦マヤ文明は、マヤ地域全体から見れば、決して9世紀や10世紀に「崩壊」したのではない。その後も諸王国が、マヤ低地南部の一部、マヤ低地北部やマヤ高地に16世紀まで興隆。
- ⑧マヤ地域には巨大な統一国家がなく、多様な王国が共存していたので回復力（レジリエンス）が高く、マヤ文明全体が崩壊することはなかった。マヤ文明がもつ多様性の強み。
- ⑨マヤ文明はスペイン人の侵略によって破壊されたが、800万人を超える末裔たちは、現代マヤ文化を力強く創造し続けている。マヤは現在進行形の生きている文化であり、30のマヤ諸語が話されている。⑩マヤ文明を学ぶ今日的意義：(1)異文化理解、(2)よりグローバルな「真の世界史」：脱「四大文明」・西洋中心史観、文明とは何か、(3)数百年、数千年の文明の盛衰と歴史的教訓：現代地球世界の諸問題解決のささやかな糸口
- ⑪マヤ文明の長期間にわたる成功と究極的な失敗の要因を知ることは、大惨事を回避する鍵になる。バイアスの認識と超克。新たなオプションの探求。マヤ文明の盛衰は、「文明とは何か」という問題を私たちに問いかけている。

参考文献

- 青山和夫 2007『古代メソアメリカ文明—マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。
- 青山和夫 2012『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』岩波新書。
- 青山和夫 2012『“謎の文明”マヤの実像にせまる』NHK 出版。
- 青山和夫 2013『古代マヤ 石器の都市文明 増補版』京都大学学術出版会。
- 青山和夫・猪俣健 1997『メソアメリカの考古学』同成社。
- サブロフ、ジェレミー 1998『新しい考古学と古代マヤ文明』青山和夫訳、新評論。
- 関雄二・青山和夫 2005『岩波 アメリカ大陸古代文明事典』岩波書店。
- トンプソン、エリック 2008『マヤ文明の興亡』青山和夫訳、新評論。
- 増田義郎・青山和夫 2010『世界歴史の旅 古代アメリカ文明 アステカ・マヤ・インカ』山川出版社。
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo, and Hitoshi Yonenobu 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340:467-471.

ナスカ社会と地上絵の終焉

坂井正人（山形大学）

今回の講演会では、山形大学が2004年から実施してきたナスカの地上絵に関する研究を紹介します。ナスカの地上絵はユネスコの世界遺産に登録されていることもあり、その名前は世界的によく知られています。特にハチドリやサルなどの動物の地上絵は有名です。しかし、地上絵が描かれたナスカ台地があまりにも広大なため、どのような地上絵がどこに、いくつ分布しているのかという点が十分に調査されてきませんでした。また、地上絵の付近には大量の土器が分布していることは知られていたのですが、これらの土器に関する綿密な調査が行われてきませんでした。そのため、地上絵やその付近でどのような人間活動があったのかについてもよく分かっていませんでした。

山形大学ナスカ調査団では、人工衛星から撮影された画像を積極的に利用するとともに、現地調査を実施することによって、地上絵の形態と分布状況の把握に努めました。また、地上絵付近の考古遺物（土器、石器など）を積極的に分析することで、地上絵における人間活動を理解しようと試みてきました。

これまで、100点以上の新しい地上絵を発見するとともに、900点以上の地上絵を踏査しました。その大部分は直線の地上絵ですが、動物、人間、台形の地上絵も含まれます。これらの地上絵を踏査し、それぞれの地上絵に共伴する土器を採取・分析することで、地上絵が利用された時期を明らかにしました。また採取された土器の特徴とその変化から、地上絵付近で行われていた行為について検討しました。

その結果、少なくとも紀元前400年頃から16世紀頃までの約2000年にわたって、地上絵が制作・利用されたことが判明しました。また、2000年間の社会変化の中で、地上絵のあり方にも大きな変化があったことが分かってきました。

今回の講演では、ハチドリやサルなどの地上絵が制作されたナスカ期だけでなく、その後のワリ期、イカ期、インカ期における地上絵のあり方を検討する予定です。それによって、地上絵の終焉について考えてみたいと思います。

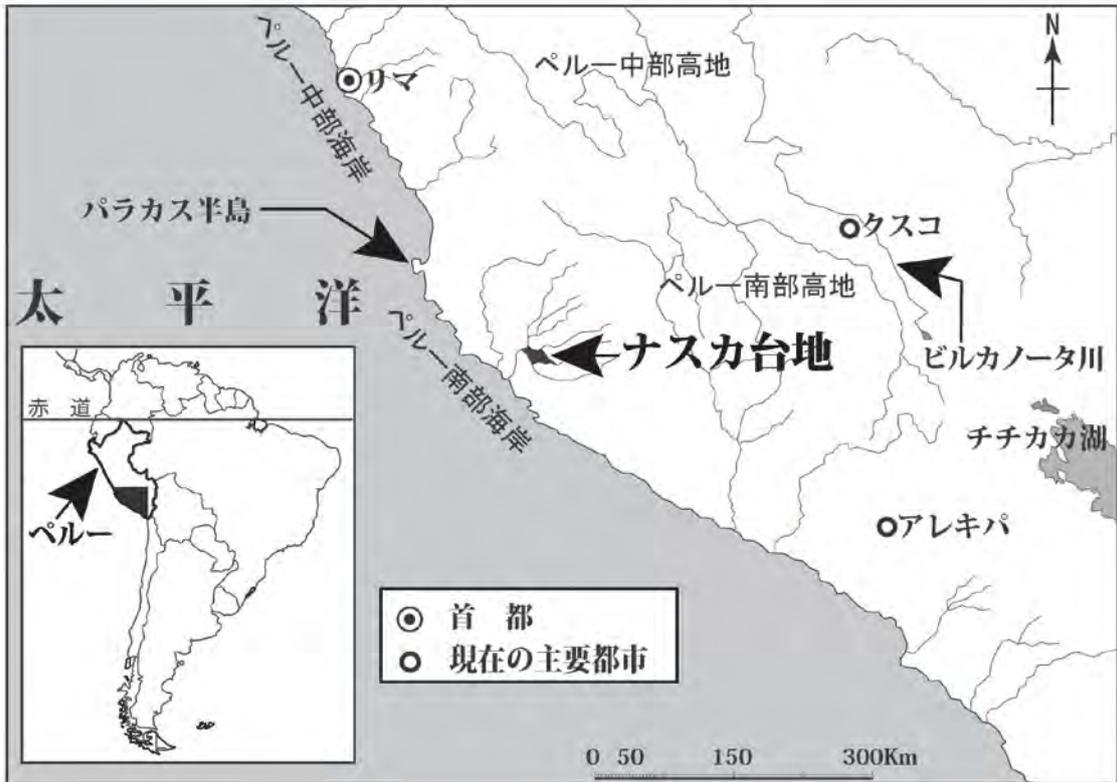


図1 地図：ペルー南部

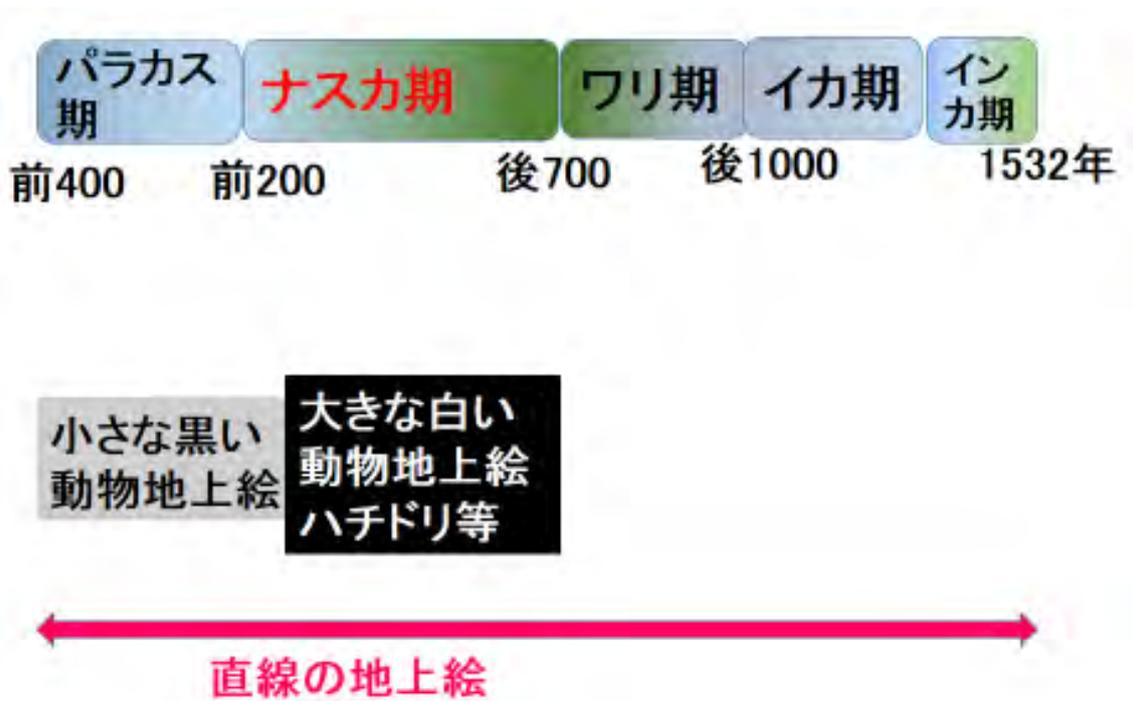


図2 年表：ペルー南海岸

国家に抗する社会カハマルカ

渡部森哉（南山大学）

要旨

世界のいくつかの地域で社会の複雑化が急速に進んだ。そうした現象は文明と呼ばれた。いわゆる世界の古代文明の1つに数えられるのがアンデス文明である。紀元前四千年紀の終わりから神殿が建設され、社会の複雑化が加速した。しかしこうした神殿を中心とした社会はいったん終わりを遂げ、その後政治的リーダーが支配する社会が出現する。中央集権的特徴が顕著で、規模が大きい社会は国家と呼ばれ、その例として、モチェ、ワリ、ティワナク、ランバイエケ（シカン）、チムー、インカがある。

アンデス地帯に国家社会が出現して以降、全ての地域が国家社会に組み込まれたわけではない。形成期に神殿を造り維持した社会とそうでない社会があったのと同様に、国家出現以降、非国家社会が多く存在した。その1つがカハマルカである。「国家に抗する社会」はフランスの人類学者ピエール・クラストルの著作のタイトルである。それは、国家に征服されないとして抵抗する社会を意味するのではなく、国家社会に移行することを望まない、敬遠する社会を意味している。カハマルカをそうした社会の一例として捉えてみたいというのが本発表の意図である。つまり、カハマルカに国家が成立しなかったということをネガティブに捉えるのではなく、1つのオルタナティブなプロセスとして理解したい。

今回のシンポジウムでは、終焉や崩壊、をテーマにして組まれた。それを裏から考えてみるためには、それを経験しなかった社会に注目すればよい。カハマルカはカオリン土器製作に特徴づけられる文化を1500年以上もの間維持した。ワリ帝国やインカ帝国の直接的支配下に入ったにもかかわらず、である。融通無碍な性格は、その社会システムに起因するのではないかと考えられる。モチェとワリの間、チムーとインカの間のように、中央集権的社会の間では、文化の融合はしばしば起こる。しかしカハマルカの場合は、中央集権的ではなかったからこそ、長期間存続できたと考えられる。

一方で国家社会は、中央集権的であればあるほどむしろ脆弱性を抱え込むことになる。アンデスの場合、中央集権度が高まれば高まるほどその存続期間は短くなるようである。モチェが800年、ランバイエケが600年（850-1375）、ワリが400年（600-1000）、ティワナクが500年（600-1100）、チムーが250年（1200-1450）、インカがせいぜい100年（1400-1532）。中央集権度が高まるほど、そのシステムの終わりは顕著に認識される。栄枯盛衰のプロセスの一時点として、崩壊を次の社会へ移行するための出発点としてみることもできるが、いずれにせよ、非国家社会ではたとえ変化を被るとしても、それを終焉と認識することはあまりない。あったとしても、日本の伝統的文化の消失などのように、かなり漸次的なプロセスである。

相対的な比較ではあるが、カハマルカのような非国家社会の方が持続可能な社会なのである

「アヤクチョの祭りと移民たち」

佐々木直美（法政大学）

2010年にユネスコの無形文化遺産に登録された「ハサミ踊り」は、アンデス文化に重要な祝祭の一部であり、尚且つアンデスの文化的アイデンティティを色濃く表象する踊りである。本発表では、このハサミ踊りを通じてアンデス社会の変化を紹介する。

①アンデスにおける「祝祭」と「踊り」の重要性

・植民地期にペルーで見聞した土地の風習を記した年代記の記録者（クロニスタ）たちは、インカ帝国においては「祝祭」と「踊り」が盛大かつ頻繁に行われていたことを書き残している。ⁱ

→インカ帝国における「祝祭」「踊り」の重要性が伺える。

・現代におけるアンデスの「祝祭」と「踊り」の多様性 → ペルーでは村ごとに独自の祭りが催される。「踊り」は祝祭には欠かせない祭りの構成要素であり、その祭りや地域性を特徴付ける。従って、「踊り」はアンデスの人々にとって文化的アイデンティティの表象の一つである。

②アヤクチョ県「水の祭り」における「ハサミ踊り」の事例

・「水の祭り」とは、ペルー中央南部のアヤクチョ県の村々で8月から9月にかけて催される雨乞いと豊穡祈願の祭りである。祭り期間は約1週間あり、その期間参加者たちの注目を最も集めるのが「ハサミ踊り」である。

・「ハサミ踊り」とは、鋏のように見える2枚の鉄片を右手で持って、手首のスナップと指を巧みに操作することでリズムを刻みながら、バイオリンとアルパ（アンデス・ハープ）の演奏に合わせて即興で複雑なステップやアクロバティックな技、さらには軽業などを競う踊りである。

アンデスの踊りは、誰もが気軽に踊りに参加することのできる簡素なものや群舞が一般的であるが、ハサミ踊りは、ハサミを鳴らすことのほか、踊り手になるために心身共にかなりの鍛錬が必要なことから、アンデスの踊りの中では非常に特殊な踊りと言える。

・ハサミ踊りの起源

一部にはスペイン人による征服以前から、鉄片の代わりに長い石を打ち鳴らして踊られていたという説がある一方で、16世紀にこの地方で発生したとされる反植民地主義的な土着の宗教運動、「タキ・オンコイ」に起源をもつとの主張が一定の支持を得ている。しかし、スペイン支配とスペインの文化をも否定し拒否したタキ・オンコイのイデオロギーは、ハサミ＝鉄やバイオリン、ハープといったスペイン由来の楽器で構成されたハサミ踊りに親和性がなく、タキ・オンコイ運動自体が1570年代には消滅しているため、この説を否定する研究者もいる。

いずれにしても、現在まで確認されているハサミ踊りの一番古い記録は18世紀の記述であり、現在の踊りと同一視できるものはそれほど古くはないと言える。

・不遇の時代

タキ・オンコイ起源説からは一定の距離を置くとしても、ハサミ踊りがアンデスの伝統的信仰と関係があることは否めない。祭りのクライマックスでは、踊り手は夜を徹して一晩中踊り続け、仕舞には踊

ることすら逸脱し、軽業や怪力などで超人的なエネルギーを見せつける。そのため踊り手にはアンデスの山の精霊が憑依するとも信じられている一方、秘儀的な事柄も踊り手たちが実践するため、カトリック的価値からは異端扱いされ、踊りが禁じられていた時代もあった。

③都市のアンデス化と村祭りの活性化

・都市と村の関係

1950年代以降のペルーの都市化に伴い、踊り手を含む多くの村人が首都リマへ移住 → 村の過疎化と踊り手の不在をひきおこす。一方、リマでは村祭りが再現され、村の生活から離れた「リマっ子」の踊り手が育つ。

村祭りは、帰省するリマ在住の人々によって資金面や人手といった側面で維持され、リマ在住の踊り手によって伝統が継承される。

・ハサミ踊りの再評価

海外公演やハサミ踊りと楽師による協会の設立に伴う都市部での積極的な広報活動によって、国内でハサミ踊りが再評価される → 1995年ペルー文化財 (Patrimonio Cultural de la Nación)、2010年ユネスコ世界無形文化遺産に登録。

④ニューヨークのハサミ踊り

・村祭りや広報活動とは全く異なる文脈において、ハサミ踊りが披露されている。→ ペルーあるいはアンデス農村を代表する文化遺産としての活動 → 出身地に対する愛着と誇りを感じさせるアイデンティティの拠り所として、認識されている。

i Cieza de León, Pedro de

2005[1553] Crónica del Perú El Señorío de los Incas, Biblioteca Ayacucho.

Garcilaso de la Vega, El Inca

1976[1609] Comentarios Reales, Tomos I, II. Caracas : Edición Ayacucho.

Guaman Poma de Ayala, Felipe

1980[1615] Nueva Crónica y buen gobierno, Biblioteca Ayacucho.

Molina, Cristobal de

1947 [1573] Ritos y fábulas de los incas, Colección Eurindia 14 Buenos Aires: Editorial Futuro.

Polo de Ondegardo, Juan

1906 Los errores y supersticiones de los indios sacadas del tratado y averiguación que hizo el licenciado Polo, Revista Historica, pp207-231. など参照。

【第二部】

アンデス音楽の調べ

アンデス民族音楽の代名詞のように使われる“フォルクローレ”。それは先住民の伝統音楽ではなく、1950年代にスペイン系音楽と融合して創り出された新しい民族音楽である。

演奏に使われる楽器は、数千年前の遺跡からも発掘されているケーナやサンポーニャ（笛）、ボンボ（太鼓）といった伝統楽器に、ギターとチャランゴ（弦楽器）を加えた編成がスタンダードである。アンデスには弦がなく、弦楽器は西洋から持ち込まれたものである。チャランゴはスペイン人の到来以降にアンデスで考案された楽器で、繊細な響きを持ち、素朴な笛の音色と調和して華やかさを添える。さらにギターの力強い低音が曲を引き締める。スペイン的旋律、素朴な伝統楽器、現代的弦楽器のフュージョンがアンデス音楽固有の魅力を演出するのである。

“コンドルが飛んでいく”に代表されるフォルクローレは、これら楽器固有の音色が醸し出すハーモニーと、アンデス山脈の牧歌的な情景を彷彿とさせるメロディーで、世界的に親しまれるようになった。

●演奏曲目

- 1・さくら、さくら（ワイニョ、サヤ）
- 2・コンドルは飛んでいく（ヤラビ、フォックスインカイコ、ワイニョ）
- 3・マリポーサ（モレナーダ）
- 4・アルティプレーノ
- 5・セニョラ チチュエラ（ティンク）
- 6・ディアブラーダ（ディアブラーダ、ワイニョ）
- 7・カネリータス（ティンク）

●演奏

グループ・アルトウラス

- | | |
|----------|--------------|
| 池谷楯子 | （ボンボ） |
| 池谷武 | （サンポーニャ、ケーナ） |
| 久保圭三 | （ケーナ、サンポーニャ） |
| 捧俱子 | （ギター） |
| 沢田麗子 | （ケーナ、サンポーニャ） |
| 鹿野明子 | （サンポーニャ） |
| 西牧利雄 | （チャランゴ） |
| （アイウエオ順） | |

